
Corona et Servus

しおバター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o r o n a e t S e r v u s

【Nコード】

N 3 4 2 7 F

【作者名】

しおバター

【あらすじ】

とある小国の破天荒王子クレイドは、ある日宮廷に連れられて来た奴隷の少女エミリーに一目惚れしてしまう。身分の差など関係無しに接してくるクレイドに戸惑うエミリーと、一方でそれを快く思わない王室との確執。エミリーが子供の頃にある約束を交わした少女であることを知ったクレイドは、たった一人の奴隷を護るために、重大な決断をする。

プロローグ（１）

かれこれ一週間近く降り続いた雨もあがり、空は久しぶりに元の青さを取り戻した。

国の西側には隣国との間に海峡が広がり、何の障害も無しに海上を渡ってくる卓越風の影響で雨が降り続くのは良くあることである。一年中、雨季であると言っても差し支えは無いだろう。

このような気候の支配する地域に住む人々には、陽の光の有り難みを良く理解している者が多い。

久々に晴れ渡ったこの日を待ちに待ったといわんばかりの面持ちで、溜め込んだ洗濯物を両手いっぱい抱えた村人が次々に戸を開き始めた。

それは爽やかで、清々しい初夏の朝だった。

しかしそんな爽やかさは、村のはずれの家畜小屋のニワトリが本日第一声を発したすぐ十分後には打ち消されることとなった。

「うおわあああああああああああああああ」

甲高い叫び声。

朝も早くから家の前でこんな声が聴こえて来れば、気にならない者はまずいないだろう。

近所の住人が５、６人、ほぼ反射的と言っていいスピードで外へ飛び出してきた。

が、その野次馬のど真ん中を信じられない速さで小さな人影が走り抜けていく。

少年、というよりも「男の子」だった。

見た目にも五歳かそこらにしか見えないその小さな子供は、明らかに成人用に仕立てられた黒いローブに身を包んで、息を切らしながら走り去っていく。

こんな早い時間からそんな子供が一人でうろついていること、そして何より身に纏っていたローブが一般市民の半年分の給料に匹敵

するほどの高級品であったこと。

一度に幾つもの常識を打ち破る光景を目の当たりにして、その場に居合わせた大人たちは総じて、言葉を失って立ち尽くしていた。それから十数分の後、家畜小屋がさらに騒がしくなってから、事態の真相は明らかになる。

馬に乗った騎士らしい人物が三人、只ならぬ雰囲気湛えて村の入り口を駆け抜けてきた。

どうやら、装備を見るからには王宮に属する騎士であるらしい。王宮に仕える騎士には、肩の装甲に鳥の羽を象った紋章が付いている。

その数は一枚から十二枚まであり、羽の数の少ない者ほど階級の高い騎士だといえる。

この騎士団は全員両肩に六枚ずつ、つまり最下位の兵士だった。モンテと呼ばれるこの小さな村は、西の海岸から東に連なる山脈までのおよそ六万五千平方キロメートルの領土を統括するエーレス王国という小国の統治下にあり、王宮を擁する首都サンダーベルクの北門から延びる街道沿いに小さな村を三つほど越えた場所に位置する。

しかしそれぞれの村は隣接しているわけではなく、実際は離れて点状にしているため、サンダーベルクからここモンテに来るまでにはどう近道にしても三十キロ以上はかかってしまう。

当然、行き来をするのであれば誰だって馬で移動する。

三人の騎士は手綱を操って馬の足を止めると、その場で跪いて動かない村人たちに質問を投げかけた。

「人を探している。この村に、大人用の高級ロープを纏った怪しい少年が侵入したと聴いているが、それは本当か」

「……………え、…ええ。先程から住民の間でちょっとした噂になっております…」

中年の農夫は顔も上げずに恐る恐る答えた。

モンテの村は外の平野との間に、木で出来た今にも崩れそうな柵

が立てられている。

成人男性の胸ほどの高さの柵は、入り口から出口まで村全体を円く囲むように連なり、村に普通に出入りするならばその二つの門を利用するしか無い。

因みに、首都側の方の門が入り口、反対側の門が出口と呼ばれている。

この村に入れば普通に出来るのは中央の大通りの終点にある出口だけであり、外壁である柵から抜け出しても外は岩盤の一枚も見当たらない平原であるため、何キロか先の様子であつてもすぐにわかつてしまう。

そのため村に侵入した「男の子」を探すのであれば出入り口にだけ気を付ければ良いということを、この騎士たちは知っていた。

未だ怯えている農夫に礼はおるか返事すらも告げずに、三人の騎士団はまた走り出そうとする。

「あ、あの……」

貴族や騎士階級に気安く話しかけることが、何を意味するのかを知らないわけではない。

しかし、いつの間にかその場に集まっていた村人たちが揃って気にしていたことを、この農夫は尋ねずにはいらなかった。

「王宮の兵士様がこのような矮小な村に、……それも、たった一人の少年を探すなど……。何か、この村に問題でも……」

緊張でうまく口の回らない農夫が言い終わる前に、騎士の一人が口を挟んだ。

「この村自体には特に問題があるわけではない」

無愛想ではあるものの、この国のお偉方は近隣の諸国に比べていくらか寛大なようである。

西の海峡を挟んだ隣国ブルジアで同じことをすれば、その場で射殺されていたに相違無い。

そう思えば税こそ軽くは無いものの、この国にいればその程度では殺されたりしない。

皮肉では無く、これは心の底から有り難いことであつた。

「国の名誉に関わることはあるが、何しろ一大事だ。我が国の王子にあたるお方が、昨晚より王宮から行方不明になられた。黒のローブの少年を見つけたら、すぐに知らせろ」

そう言い放つて、騎士団はその場を走り去つた。

村人たちにはまだ気になることがあつたが、これ以上首を突つ込めば今度こそ命に関わりかねない。

それからしばらくの間、村は今朝の話題と噂で持ち切りだつた。

王宮からこの村までの大人ですら馬で移動する距離を、一晩で駆けて来た謎の「男の子」のこと。

そして、王子が脱走したという一大事にも関わらず、軽装の騎士がたつた三人、それも王族の直属とはいえ最下層にあたる者しか派遣されていないということ。

爽やかな初夏の朝は、一人の迷惑な王子（らしい男の子）によって台無しにされたのであつた。

プロローグ（２）

その名をクレイドという小さな男の子は、幼いながらに自身の中で日を増すごとに逞しく育っていく好奇心に打ち勝つことが出来ず、数ヶ月前からしょっちゅう王宮を抜け出しては行方不明になるという、他人からすれば迷惑以外の何物でも無い脱走癖を持つようになっていた。

一週間に三回以上は脱走を試みるこの腕白王子は、すでに周りの大人たちにその対処法を身に付けられている。

大体が学習室で帝王学を教わっている最中に抜け出して、調理場の倉庫で給仕長に取り押さえられたり、堀の外を巡回する警備員に見つかったりして、腕白五歳児の大脱走劇はものの一時間足らずで終幕を迎えるのが常だ。

しかし、今回の脱走はいつもとは違う。

この辺りの土地一帯を統括するエーレスの誇り高き王族の一員クレイド・ファン・エーレスという幼い冒険家は、王宮を離れてこんなに遠くまで出てきたことは無かった。

身を隠すために羽織ってきたローブのおかげで雨や夜間の寒さを凌ぐことは出来たが、何も無い真っ暗な夜道は彼にとって初めての光景であつたため、一度走り出したら怖さのあまりそのまま止まる事が出来なくなってしまった。

なんとも間抜けな話ではあるが、それでも大人ですら馬で移動するような距離をたった一晩で走り抜いてしまった。

王族と呼ぶに相応しい気品の欠片も無い。

クレイドはわけもわからずに飛び込んだモンテの村で漸く、空が白んできたことに気が付いた。

ほんの数時間前まで雨が降っていたのが嘘のように思える、快晴。首都サンダーベルクの北門から伸びる街道を辿れば、モンテの村が五キロほど先にうつすらと見えてくる地点がある。

そこから北東に分岐する脇道に乗り換えれば誰でも迷わずにこの村に辿り着けるわけだが、周りは平坦な野原であるのに関わらず、この脇道だけはいきなり上り坂から始まっている。

そこまで急な坂では無いものの、村の入り口から振り返ればその麓が良く見える位の高低差がある。

坂を上ったとき、ふとどれだけ上ってきただろうという好奇心から来た道を振り返ることはごく自然な行為であり、クレイドにとってもそれは例外では無かった。

良い汗をかいたとばかりに振り返ると、その視線の先、つまりあの分岐点の辺りに、見覚えのある格好をした騎士が三人ほどいるのがわかった。

驚きと恐怖のあまりに、クレイドは異様な叫び声をあげて早朝の静かな村を走り出したのだった。

…こうして物語は冒頭の部分に繋がることになる。

プロローグ（3）

目立った服装に、目立った行動。

大人用の黒い高級ローブを引き摺りながら奇声をあげて走り回る小さな男の子の目撃情報は、村のあちこちで入手することが出来た。ここモンテの村自体はそんなに大きくは無いが、探す相手は一晩で三十キロの道程を走り抜いてみせた常識外れな五歳児だ。

行動も全く予測がつかないし、絶えず猛スピードで動き回っているらしく、目撃情報が頻繁に更新されていく。

道もほとんど整備されていないため、三人の騎士たちは村長の自宅に無理やりに押し入り、乗っていた馬を敷地内に繋いで自らの足で搜索を続けた。

村の出入り口には、その場でいきなり見張り役を命じられてしまった可哀想な村人が必死に不満を押し殺そうとしているような顔で立っている。

村には辺り一体を見渡せるような高い場所は存在しないため、意外と捜査は難航していた。

一方で当の脱走犯は、これもまた意外なことに見事に捜査の手から逃げ遂げていた。

普段なら、王室の大切な探し物ともなれば村人たちは自身の名誉のために張り切って捜査に協力を申し出たのだろうが、今回はそうもいかなかった。

「探し物」ならぬ「探し人」だったからである。

それが一国の王子であるならば、下手に捕まえて傷でもつけてしまえば最後、どんな厳罰が待っているか判ったものではない。

そんな彼らの胸中を知ってか知らずか、噂の脱走王子は人がいる道だろうとお構い無しに駆け抜けていく。

要はクレイドにとっては掴まりさえしなければ良いわけだが、さつき通りすがりに見た村の出入り口には、門番らしき人物がじつと

立ち尽くしているため、とにかく逃げ続けることしか出来なかった。そんな村全体を巻き込んだ大脱走劇が始まってから一時間半程の時間が流れた頃、いい加減に走り疲れてきたクレイドは村の隅に位置する誰のものとも判らない家畜小屋の影で腰を下ろした。

興奮状態が解けて、溜まった疲れが段々と心身を蝕む。

一体自分は何をしているんだろう、と子供ながらに半ば馬鹿らしくなってきたその時、小屋の中から微かに「人の声」が聴こえた。心臓が止まったような気がしたが、なんとか冷静さを取り戻す。万事休す、か。

絶対に足音を立てないように、それだけに全神経を捧げながら、ゆっくりと入り口に近づく。

すると途中で、壁の木が腐って剥がれている部分があることに気付いた。

クレイドはその場でしゃがみ込み、その小さな穴から家畜小屋の中を覗く。

瞬間、生暖かい湿った風が顔面に直撃した。

強烈な悪臭を伴う風は、どうやらこの中で飼育されている牛の息だったようだ。

クレイドはあまりの悪臭に目に涙を浮かべて、一旦後ろを振り返って新鮮な空気を吸い込んでからまた穴を覗く。

実は牛という生き物を見るのは初めてのことだったのだが、今の彼にとってそれは重要なことでは無かった。

他にも牛が四頭ほど、土だか草だか良く判らない塊をせつせと口に運んでいる。

その中で一番入り口から遠い牛の柵の前で、小さな人影のようなものが動いているのが判った。

子供、それも女の子。

肩まで伸びた金髪に、どう考えても服とは呼ぶことの出来ない布切れを身に纏っていて、裸足で座り込んだまま牛に何か喋りかけている。

幼いこの国の王子には、なぜあの女の子があんなにみすばらしい格好をしているのか理解できなかった。

そんなことを考えていると、何を思ったのか、その女の子は目の前の牛がもりもりと食べている塊の中から、何かの草のようなものを掘り出して、おもむろに匂いを嗅ぎ始めた。

朝食を横取りされた牛は、少しの間何とも言えない表情で少女の方を見てから、気を取り直したようにまた食事を開始した。

嫌な予感がする。

王宮の大食堂で振舞われる朝食は、高級なパンや上質な干し肉などが当たり前のようにテーブルに並ぶ。

庶民が普段何を食べているのなんて全く判らなかったが、どうやら王子の嫌な予感はお的中していたらしかった。

壁の向こうの女の子は、二、三度躊躇うような素振りを見せてから、あろうことか手に持っていた牛の工サを口に運ぼうとしていた。

「ええええええええええええええええ」

驚きのあまり、クレイドはまたもや大声をあげていた。

その声にギリギリ食事を妨害された小さな女の子は、こちらもまた驚いて辺りをキョロキョロと見回している。

よく見ると、目に涙を浮かべてガタガタと震えていた。

そこでなぜか理性が吹っ飛んだクレイドは、一気に小屋の入り口まで駆けて行き、戸を勢い良く開けた。

少しだけ小屋の中に明るさが増す。

ここには牛も数匹飼われているし、何かと手入れもされている感じだった。

つまり、いつ人が来ても不思議では無い。

見つかつてまた王宮に連れ戻されるのは嫌だったが、クレイドにはこの女の子が家畜のエサを食べようとしているのがもっと不快に感じられた。

理由は、判らない。

なぜこの目の前の、自分と同じくらいの小さな子供がわざわざ小

麦のパンの代わりにそこらに生い茂っているような草を食べるのかも、なぜ自分がそれを不快に思うのかも、クレイドにはその理由がさっぱり判らなかった。

しかし、気が付いたらこうしてこの家畜小屋に押し入っていて、女の子はその場で恐怖のあまりに怯えていた。

「ごめんなさい……！ごめんなさい……！！」

震える声でそう繰り返しながら、大きな目をギュッと瞑って両手を顔の前に出している。

叱られるのを極端に恐れているのだろうか、何者かも判らない小さな男の子にすら許しを請い、泣き続けている。

理由は、判らない。

それでも、この小さな王子にとって、この光景は衝撃的なものだった。

クレイド自身も、昔から悪戯をしては兄たちに頭を殴られてきた。しかし、それだけのことだ。

なぜそこまで、この女の子は恐がっているのか、そもそも、何がそんなに恐いのか、そして、なぜこんなに胸が締め付けられるような気持ちになるのか、クレイドにはその理由が判らなかった。

この日この場所で、少年と少女は出会ったのだ。

王子と奴隷の少女1

一年間の内で、雨の日と晴れの日はこちらの方が多いのだろうか。そんなことを訊かれると、国民は大概首を傾げてしまふ、そんな気候の下に栄える小王国、それがエーレスである。

星が自ら回っている、という発想が常識として社会に浸透し始めたのは、百十数年ほど前にどこかの国の学者たちがある功績をあげたことがきっかけと言われる。

常人には理解し得ない奇怪な実験や考察を生業とする彼らは、国家や他人から悪魔崇拜の疑いをかけられながらも自身の飽くなき探究心に忠実に従い続け、異端者の戯言を世界の常識へと覆してみせた。

昼と夜の差をも生み出すこの大きな力は、大気の流れですら簡単に狂わせる。

大陸の遙か南で発生した湿潤な風は、この星の「回転」と相まって東に傾き、西の海峡を渡ってここエーレスの地に届く。

この風が一年を通してほぼ変わらずに吹き続け、頻繁に雨をもたらすという仕組みになるわけだが、だからといって近辺の土地は決してジャングルのように木々が生い茂っているわけでも無く、むしろ砂漠地帯やただの野原と化している平原が多く存在する。

海に面した土地はとりわけ方々からの風を受け入れやすく、侵入した多くの種類の風が砂地を散らかしては植物の成長を妨げているからである。

そんな一年中雨季の続く荒地を統治する王国エーレスの歴史は、約三百年前に大陸の南で生活を営んでいた部族の大掛かりな移動に始まる。

急激な人口増加に伴う相次ぐ食糧難に限界を悟り、彼らは新天地を求めて北へと歩を進めた。

このヴィーマ族と呼ばれる人種は、歴史的には南の地で数々の大

きな武功を収めたことで知られており、血筋であるのか、一族を挙げて「戦闘」を好む種族として名を馳せていた。

現在では亜種との混血が進み、平和を主張し戦争に対して強く反対する国民も年々増えてきてはいるのだが、王室をはじめとする国の公の機関では「武人としての誇り」の名の下に軍事的な意味で心身の練磨を正義の行いとする政治・教育方針が根強く残っている。

あまりにもその教えに熱心であるために、さほど宗教色が強くないこともこの国の特徴のひとつとして挙げられる。

国民の間では目を見張るスピードで非暴力の精神が伝播し、国家を立ち上げた偉大なる戦闘部族の功績を敬愛してやまない国との確執を主な原因として、内政は必ずしも安定しているとは言えない状態にある。

その渦中で、現国王の新しい王子が誕生した。

その名をクレイド・ファン・エーレスと言い、彼は王族たる品格をただのひとも持ち合わせないまま、ただの腕白小僧としてすくすくと成長し、王宮からの脱走を始めた数々の悪戯や悪行をはたらくようになった。

実際には第三王子という扱いになるが、クレイドの母にあたる妃ソフィーは王室の他のどの女よりも国王の寵愛を受けていたため、彼女が病気により悲運の死を遂げた後もその息子であるクレイドは例外的に特別扱いを受けて育ってきた。

つまり、この破天荒王子の性格はこの甘やかしの生んだ産物ということである。

しかしだからと言って何もかもが許されるわけでは無く、彼が五歳のときに王宮を飛び出して近隣の村で騒ぎを起こした事件を皮切りに、国王は息子に非難の目を浴びせるようになった。

実際には、その数ヶ月前から始まった王子の脱走癖が顕著になってから間もない頃には既に、国王の胸中に巢食う憎悪は巨大なものになっていたのだが。

王族の一員であるという自覚も無しに、国の名誉に傷をつけてば

かりいる、出来損ないの息子。

クレイドが十八の誕生日を迎える頃には、国王の中には彼を息子であると認識する心さえもほとんど残っていなかった。

王子と奴隷の少女2

「おはよう、イリーナおばさん」

「あらおはようございます、王子。朝から公務ですか？」

暦が夏の到来を告げてから久しいある朝、隠しもせずに堂々と欠伸をしながら廊下を歩く少年と会話をしているのは、この宮殿に仕えて三十年を数えるベテランの清掃員、イリーナだ。

物心付いた頃から何かと相談に乗ったり世話を焼いてくれた気さくで頼り甲斐のある彼女を、クレイドは昔からイリーナおばさんと呼んで慕っている。

「いや、そういうわけじゃないんだけどさ。この間評議会で通った新しい法案がどうのこうのってんで、俺も目を通しておかなきゃいけないらしくて」

「それは大変ですね。でもお仕事だものね。頑張って」

箒を片手に優しく微笑むイリーナに手を振って、王子はまた歩き出した。

この通路を端から掃除をしているのなら、もう軽く十部屋以上は清掃済みということになる。

頑張っつていつもより数時間は早く起きてきたというのに、王宮の朝は思っていたよりもずつと早かったようだ。

イリーナおばさんは果たしていつも何時に起きているのだろう、と、先月に十八の誕生日を迎えたばかりのクレイドは考える。

やがて階段のある場所に出て、眠い目を擦りながら地下まで降りて行く。

クレイドが足を運んだ先は、会議室だった。

重い扉を開けてその中に歩を進めると、彼の父である国王をはじめとして、その専属の執事や護衛兵、第一・第二王子に当たる兄、騎士隊の隊長格、近隣の都市の市長やその他の大貴族など、この国に暮らしていれば至る所で名前を聴くような大物ばかりが部屋の中

央を囲んで着席している。

そこらの農村の住民がその場に居合わせでもしたら、瞬く間に卒倒してしまうに違い無い。

寝ぼけた顔のまま入室したクレイドを、一同が一斉に凝視した。

「あ……………」

王宮に住む者としてあるまじきことだが、どうやら一番遅れて入ってしまったらしい。

とても冗談を言つて誤魔化せる雰囲気では無いと察したクレイドは、軽く咳払いをして自分の席に座る。

大人たちは黙ったまま視線を手元に用意された書面に移し、軽く黙読を始めた。

必死で欠伸を押し殺しながら、新しい法案の書かれた文書を拾い上げる。

すぐに睡魔に襲われてうとうととして、机の上に片肘をつき始めたところでついに二番目の兄キースが口を開いた。

「クレイド！時と場を考えろ！神聖な会議の場で、その様な態度が許されると思っているのか」

「んんん…………ふん」

なんとか起き上がったクレイドは、あろう事か今度はその場で伸びをし始めた。

「父…陛下！陛下からも何か仰つて下さい。でないとこいつは…」
つい感情が昂ってしまった弟を左手で静かに制したのは、その兄であるマウリッツだった。

「う…すみません。つい…」

キースはなんとか冷静さを取り戻して、父フランスの方に目を向ける。

しかし、彼は大した反応も見せずに会議を進め始めた。

今回の議題になった法案は、内政の不振に伴い諸外国との外交を限定するという内容のものであった。

これまでそれなりの関係を築いてきた総ての外国との関係を書面

上で白紙に戻し、その後も友好関係を維持したい国家との間には改めてその旨を記した証明書を発行する。

エーレスは世界でも有数のぶどう酒の産地であるため、この国と良い関係を保ちたいと考えている国は沢山存在する。

そのためこのように勝手な外交相手の選定をしたところで、少なくとも周りにそっぽを向かれたり孤立状態になってしまう心配もない。

しかし、この政策は表向きではそうした外交の見直しということになっているが、実際の狙いはそこにあるわけでは無かった。

エーレス王国は三百年前の建国以来、ずっと特定の宗教とはほぼ無縁と言っても差し支えの無い歴史を築いてきた。

地方での小さな宗教団体の活動や土着の神の信仰は存在したが、どれも特筆すべき規模のものでは無かった。

しかし、三年ほど前から、国内のあちこちで西の隣国ブルジアからの他部族による宗教活動が盛んに行われるようになった。

遙か南の大陸で発祥したこの宗教は、当時の発祥地が強大な軍事国家であったため、その植民地下で熱心な布教活動が行われるようになり、現在では世界で最も多くの信者を擁する強力な宗教となった。

ある日世界の創造主である神と一体化した小国の軍人リユーディガーが苦悩に満ちた人間界と神の世界を救うために決起した、といった内容が書かれた分厚い経典を掲げた司祭が聖人リユーディガーを信じるものは必ず救われると謳い、世界中に点在する教会には毎日多くの信者が出入りしている。

その創始者である聖人リユーディガー・ヴェンデリヒの名前が語源になって、今やヴェンダー教といえば誰にでも通じてしまうほどである。

「しかし各国の評議会や軍事政策などの非宗教的要素の介入によってヴェンダー教の伝播には長い年月とともに微妙な屈折が生じて、無数の宗派が誕生するに至った。そこで勢力を拡大しようと目論ん

だ一派が、ついに我が国に目を付け始めた、というのが事の発端でございます」

国王の執事が、現在この国に起こっている問題を端的にまとめ上げた。

「その一派というのが、他でも無いブルジア王国というわけだな」

「左様でございます」

事態はクレイドが思うよりもずっと深刻な様子だ。

次に重い口調で話を切り出したのは、執事の三つ左隣に座っているある都市の市長だった。

「私の街においても、年々その宗教活動の影響が強く見受けられるようになっていきます。市政や国政に対するデモも、昔に比べて頻発するようになったことは、既にお判り頂いていると存じます」

別の都市の市長が、さらに続ける。

「我が国においても、既に純血のヴィーマの方が珍しい状況になってきております。他部族との混血が進み、武人の誇りを失った国民は総じて戦争に反対する声明をあげている。そんなところに宗教などというものを持ち込まれでもしたら、お言葉ですが内政はさらに悪化の一途を辿るだけでしょう」

「つまり、その対策としてブルジアへの一切の物資援助を取り止め、国家間の縁を完全に切る。それがこの政策の真の狙いというわけですね」

この流れで総てを理解した第一王子マウリッツが、新政策の本質を言い当てて見せた。

評議会で可決された議案は、王室でのこのような少数人数での会議にかけられ、最終的に国王の認可を得ることによって完全に可決されることになる。

ここまで話が進めば、この法案が正式に公的文書に載ることには何の障害も無い。

しかしここで、空気の読めない第三王子が口を挿み始めた。

「でもそれなら、ただ単にブルジアにお前とはもう付き合わない

って言えば済むんじゃないの？どうしてわざわざ他の関係無い国との関係も白紙に戻す必要があるのさ」

先月成人になったばかりのクレイドにとって、このような王宮での本会議に参加するのは初めてのことであり、当たり前のことをわざわざ問い直すことの恥ずかしさをまるで理解していなかった。

「こ…この馬鹿…」

再び頭に血が上がりかけたキースを静め、マウリッツが答える。

「そんなストレートなやり方では駄目なんだよ、クレイド。いきなり自分の国だけ物資援助が断たれたら、誰だって理不尽に思うはずだ。もし逆上でもされたら、内政の不安定な状況のまま戦争を強いられることになるだろう。その危険さはお前にも判るだろう？」

落ち着きを取り戻したキースが、さらに説明を補足する。

「あくまでも表向きでは、諸外国との外交の見直しという形をとるんだ。それがどんなに見え透いた嘘であっても、とにかく相手に武力行使をさせる口実を与えちゃならないってことだ」

「へえ……なんかよく考えてあるんだなあ」

その後この新しい法案は見事に国王の認可を得るに至り、午前のうちに会議は終了した。

会議室を出る際、国王は少しの間クレイドを睨むような目つきで見つめていたが、やがてそのまま執事と一緒に歩き去ってしまった。クレイドが最後に父親とまともな会話をしたのは、もう何年も昔のことである。

そんな冷め切った関係にも慣れてしまったクレイドが自室に戻ろうとすると、途中で一番目の兄マウリッツと擦れ違った。

「陛下のお顔に泥を塗るような真似はよせ」

たった一言吐き捨てて曲がり角へ消えていった兄の表情は、ほんの一分ほど前に見た父親のそれと同じものだった。

兄としての良い顔を見せるのは公衆の面前だけであり、私的に会えば常に冷たい視線を浴びせられる。

クレイドには、それが面白く無い。

「なんだよ陛下陛下って。…その前に俺たちの親父じゃねえかよ」
誰にも聴こえないように呟いてから、王子は愛するベッドにただいまを告げるべく自室へと足を運んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3427f/>

Corona et Servus

2010年11月28日13時03分発行